

日本語学習者の作文産出に関わる不安要因の関連

石橋 玲子

1. 研究の背景と意義

外国語の学習、習得、使用に影響を及ぼす要因として、情意的要因が理論的枠組みで取り上げられたのは Krashen & Terrell (1983) の情意フィルターの仮説である。Krashen & Terrell (1983) は、従来の認知的要因に加えて情意要因の重要性を唱え、目標言語の入力を効果的にするには学習者の情意フィルターを下げることでありとしている。その後、MacIntyre & Gardner (1994) は、第 2 言語⁽¹⁾習得の入力、処理、出力のすべての認知過程での情意的要因の重要性を実証した。情意的要因の中でも不安は言語習得や使用の阻害要因として挙げられる (Young, 1986; Aida, 1994)。しかし、これらの第 2 言語の不安研究で主に扱われているのは、発話に関わる不安であり、読み、書きに関わる不安はまだほとんど検討されていない。書くことは認知的作業であると同時に情意的であるとされる (Hays, 1996)。学習者が第 2 言語で作文することに関連する不安の実態を検討することは、学習者の書くことを支援、促進するためには重要であると考えられる。本研究では第 2 言語不安を元田 (2005 : 8) の定義に倣い、「第 2 言語の学習、使用、習得に特定的にかかわる不安や心配、それによって引き起こされる緊張や焦り」と定義する。第 2 言語の作文不安は「第 2 言語での文章産出にかかわる不安や心配、それによって引き起こされる緊張や焦り等」とする。

2. 先行研究

2.1 第 2 言語不安

第 2 言語不安の研究では、Horwitz et al. (1986) が第 2 言語教室不安尺度 (Foreign Language Classroom Anxiety Scale: FLCAS) を開発し、第 2 言語不安の主要構成要素として「コミュニケーションへの不安」「テスト不安」「評価に対する恐れ」を挙げている。しかし、「テスト不安」はその後の MacIntyre & Gardner (1989) により第 2 言語不安と別であることが明らかにされている。第 2 言語不安の研究は、その後第 2 言語不安の特定だけでなく、不安と成績などの他の要因との関連が検討されている (Horwitz & Young, 1991; Young, 1986)。しかし、これらの研究の対象者はほとんど英語学習者である。日本語学習者を対象とした研究では Aida (1994) 等が挙げられる。Aida (1994) は、米国の大学の日本語学習者を対象に日本語学習教室不安を調査し、第 2 言語不安として「発話不安」「評価に対する不安」を抽出している。また、第 2 言語である日本語不安と成績間に負の相関を見出し、Horwitz & Young (1991) などの研究結果を支持する結果を得ている。さらに、Saito & Samimy (1996) でも同じく米国の大学の日本語学習者を対象に日本語能力の習熟度別に外国語不安を調査し、初級では学年が成績の予測要因だが、中上級では言語教室不安が予測要因になると

報告している。Machida (2001) は豪州の初級日本語学習者を対象に調査し、不安が第2言語学習の成功の最も良い予測の一つであるとした。一方、元田 (1997, 2000) は目標言語使用環境での日本での日本語学習者を対象に第2言語不安を調査し、教室内不安と教室外不安からなる日本語不安尺度を開発している。外国語環境、目標言語使用環境を問わず、これらの第2言語不安の研究では対人コミュニケーションに関わる「発話」「聴解」に関わる不安が主要であり、第2言語での読み、書きに対する不安の研究はまだ非常に少ない。

2.2 第2言語の作文不安

第2言語の作文に関する不安を扱った研究として Cheng et al. (1999)、Cheng (2002) がある。Cheng et al. (1999) は、従来の研究が第2言語環境に偏っており学習者の母語にも同一性がないと批判し、外国語学習環境で英語を専攻している母語を同一とする台湾の大学生 433 名を対象に、作文不安と第2言語不安の構成要因を検討している。第2言語不安は Forwitz (1986) の FLCAS を、一方、作文不安は第1言語の作文不安尺度である Daly & Miller (1975) の第2言語版 SLWAT を使用し、第2言語不安は「会話への自信の低さ」、「教室活動への不安」、作文不安は、「作文に対する自信の低さ」、「作文への嫌悪」、「評価への不安」の因子により構成されており、第2言語不安と第2言語の作文不安の構成要因が異なること、会話でも作文でも第2言語学習では自信が大きく不安と関連していたことを明らかにした。また、第2言語不安や作文不安は、実際の会話や作文のコースの成績より学習者の自己評価の成績との相関が高かったと報告している。さらに、Cheng (2002) では、外国語作文不安への学習者の認識と学習者差との関連を台湾での英語専攻の 165 名の大学生を対象に調査し、第2言語作文不安度と学年による差がなかったこと、ただし、学年が上がるほど作文不安が高まる傾向にあること、また、回帰分析の結果、作文能力に対する学習者の認識が実際の作文の成績より作文不安の予測につながるという結果を得ている。しかし、これらは、いずれも英語学習者を対象としているものであり、日本語学習者を対象とした作文不安に関する研究は管見の限りまだない。

3. 研究の目的

本研究の目的は、日本語を学習している中上級学習者の作文に関わる情意要因、特に不安要因を取り上げ、その実態、および成績、習熟度との関連を検討することである。さらに、研究結果から日本語での作文産出に関わる情意要因に配慮した教育への示唆を提示することである。研究課題は以下の通りである。

- (1) 日本語学習者の作文に関わる不安はどのような因子構造を持つのか。
- (2) 作文に関わる不安と作文の成績とは関連するのか。
- (3) 作文に関わる不安と学年別の習熟度との間に関連があるのか。
- (4) 作文不安の高いグループと低いグループでは不安因子の特性に違いはあるのか。

4. 研究の方法

4.1 対象者

対象者は、バンコク（タイ）の C 大学で日本語を主専攻とする学習者 126 名（内訳：1 年 36 名、2 年 34 名、3 年 32 名、4 年 24 名）である。日本語能力は中級から上級である。

4.2 手続き

調査は作文⁽²⁾の授業に質問紙調査法で実施した。調査票は Cheng et al. (1999) が使用した SLWAT（第 2 言語作文不安尺度）で作文不安として抽出された因子に含まれる 19 項目の質問で構成されている。ただし、質問項目中の目標言語「英語」は「日本語」に変更している。調査票は日本語訳にしたものにタイ語訳を併記し、各質問に 5「非常にあてはまる」から 1「まったくあてはまらない」の 5 段階で回答してもらった。調査実施時期は 2009 年 6 月から 7 月である。

5. 結果と考察

5.1 作文に関わる不安要因の因子分析結果

調査票の各項目は回答された数値（5「非常にあてはまる」、から 1「まったくあてはまらない」）を得点とした。タイ人日本語学習者の作文産出に対する不安の特性を個々の質問項目結果を規定している潜在因子から探るために、調査票の各質問項目の回答について探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を実施した。固有値の衰退状況と因子の解釈可能性から妥当な因子数を 4 因子と判断した。表 1 に因子分析の結果を示す。各因子の項目間の信頼性係数はクロンバックの α 係数で示す。統計処理は SPSS14.0J を用いた。

表 1 作文に関わる不安要因の因子分析結果（プロマックス回転）

項目	F1	F2	F3	F4
第 1 因子 作文産出不安 ($\alpha=.82$)				
1 日本語で書くのは上手ではない	.86	-.03	-.01	.12
3 日本語の作文の課題を出された時上手に書けないことが分っている	.63	.12	.18	-.20
8 日本語で自分の考えをはっきり書くことはできないように思う	.59	-.33	-.04	-.23
2 クラスの他の人と同じくらい日本語で書けるとは思わない	.58	.20	-.13	.04
6 日本語で自分の考えをまとめるのはすごく時間がかかる	.50	-.13	-.13	.08
5 授業の前でも日本語の作文の授業では上手に書けないだろうと思っている	.47	.46	-.05	.11
4 私にとって日本語でいい作文を書くのはやさしい	-.42	-.14	.05	.25
第 2 因子 作文評価不安 ($\alpha=.80$)				
17 自分の作文を評価されると分っているときに日本語で作文を書くのはこわい	-.02	.90	.04	.02
18 先生が自分の日本語の作文を評価するのはこわくない	.05	-.80	.04	-.02
16 自分の日本語の作文が評価されるのはすきではない	-.07	.60	-.06	.05

19 日本語で書く時他の人とディスカッションするのは楽しい経験だ .12 -.42 .15 .25

第3因子 表現志向 ($\alpha=.81$)

13 日本語で自分の考えを書くのが好きだ -.11 .01 .85 -.05

12 日本語で自分の考えを書きとめることを楽しみにしている .19 -.16 .78 .11

11 日本語で書くことを楽しんでいる -.09 .14 .63 .32

14 日本語で書いて自分の考えを表すのは時間の無駄のように思う .18 .07 -.54 .21

第4因子 作文自信 ($\alpha=.67$)

10 日本語で書いたもので自分の考えを見るのが好きだ .12 .00 .16 .72

7 私が日本語で書いた作文をみんなは楽しんでいるようだ -.05 -.17 -.25 .66

9 日本語で作文するのはとても楽しい -.10 -.05 -.00 .61

15 先生以外が自分の作文を評価してもかまわない -.03 .17 .02 .41

因子間相関	F1	1.00			
	F2	.45	1.00		
	F3	-.19	-.12	1.00	
	F4	-.48	-.36	.55	1.00

注：質問の前の数字は調査票の質問番号を示す。

第1因子は「1. 日本語で書くのは上手ではない」「3. 日本語の作文の課題を出された時上手に書けないことがわかっている」「8. 日本語で自分の考えをはっきり書くことはできないように思う」「2. クラスの他の人と同じくらい日本語で書けるとは思わない」といった項目に高い因子負荷量があり、外国語である日本語で作文を産出することへの不安感を表しているため、「作文産出不安」と解釈された。第2因子は「17. 自分の作文が評価されると分っているときに日本語で作文を書くのは怖い」「16. 自分の日本語の作文が評価されるのは好きではない」の項目に正の高い因子負荷量があり、「18. 先生が自分の日本語の作文を評価するのは怖くない」の項目に負の高い因子負荷量があったため「作文評価不安」と解釈された。第3因子は「13. 日本語で自分の考えを書くのが好きだ」「12. 日本語で自分の考えを書きとめることを楽しみにしている」「11. 日本語で書くことを楽しんでいる」などの項目に高い因子負荷量を示しており、「表現志向」と解釈された。第4因子は「10. 日本語で書いたもので自分の考えを見るのが好きだ」「7. 私が日本語で書いた作文をみんなは楽しんでいるようだ」「9. 日本語で作文するのはとても楽しい」などの項目に高い因子負荷量があったため、書くことへの自信が読み取れるので「作文自信」と解釈された。本研究のタイ人日本語学習者の作文に関する不安の因子構造は4因子構造であり、「作文産出不安」「作文評価不安」「表現志向」「作文自信」で構成されていることがわかった。この結果は台湾での英語学習者を対象とした Cheng et al. (1999)の結果と一部異なる。これは、Cheng et al. (1999)においても結果の解釈の制約として挙げているように、学習言語が英語か日本語か、学習環境が外国語環

境においてもどこの国で学習しているかなどの相違によることが考えられる。

5.2 作文に関わる不安要因と成績との関係

次に、作文に関する不安などの因子が学習者の作文の成果に影響を与えるのかどうかを検討するために、作文不安に関わる因子と作文の成績との関連をみる。作文の成績は、調査時の学期期末試験の作文得点を使用した。ただし、学年、クラスにより得点の平均点、標準偏差が異なるため、標準化した得点を使用した。標準化得点は各得点からクラス平均を減じ、クラス標準偏差で除して算出している。表2に作文不安の各因子と成績の相関係数を示す。

表2 作文に関わる不安因子間と作文成績間の相関係数

	作文産出不安	作文評価不安	表現志向	作文自信	作文成績
作文産出不安	1.00				
作文評価不安	.50**	1.00			
表現志向	-.31**	-.22*	1.00		
作文自信	-.45**	-.33**	.48**	1.00	
作文成績	-.19*	-.11	.02	.10	1.00

** $\rho < .01$ * $\rho < .05$

表2に示すように、作文成績との間に有意な相関関係があったのは作文産出不安の因子で5%の有意で負の相関が観察された。作文の成績が作文産出に対する不安と負の相関があることから、作文産出不安の高さと作文の成績の低さには関連があることがわかる。しかし、これは作文産出不安因子と成績間の因果関係を示すものではない。さらに、作文産出不安と評価不安間に1%で有意な正の相関がみられ、作文産出不安と表現志向、作文自信間にはそれぞれ有意な負の相関がみられた。また、表現志向と作文自信間には有意な正の相関が観察された。このことより、作文産出不安は評価されることへの不安との関連が高く、作文産出不安の高い学習者は日本語で表現することに対する楽しみや自信が低い傾向にあることが分る。次に、タイの大学生の日本語の作文に関する不安要因に学年別の習熟度による差があるのかを検討する。

5.3 作文に関わる不安要因と日本語の習熟度との関係

日本語を学習している本研究のタイ人大学生の作文に関する不安の因子構造が4因子であることがわかったが、日本語の習熟度により各因子間に違いがあるのかを検討するため、学年毎に因子毎の因子得点平均点を算出し、一元配置分散分析を実施した。結果を表3に示す。

表3より、本研究の中級から上級の大学生の学年別の日本語の作文産出不安や評価不安による有意差は観察されなかった。しかし、表現志向においては学年別の平均値に0.1%の有意差で差があった。どの群間に差があるのかをみるために、最小有意差法で多重比較を行った。その結果、1年生、2年生、4年生と3年生間に有意な差が認められた。また、作文自信においても群間の平均値に5%の有意差で差があり、最小有意差法の多重比較の結果、1年生、2年生と3年生間に有意

な差があることがわかった。これにより、タイの中級から上級の大学生においては、作文産出不安や評価不安には学年による習熟度の差がなかったが、表現志向や作文自信には1年生や2年生の中級の学習者が3年生や4年生の中上級レベルより有意に平均値が高いことから、レベルが上がるほど、作文という表現への楽しみや自信が減少していく傾向があることがわかる。大学における作文の授業の内容が高学年になるほど学習者の身近なことを表現する作文授業から、学術的、ビジネス文書など専門的な作文技術の習得へと変化することも影響していることが考えられる。

表3 因子尺度得点の習熟度別平均値と標準偏差 ()内は標準偏差

	N	作文産出不安	作文評価不安	表現志向	作文自信
1年	36	3.53(.63)	2.64(.84)	3.59(.66)	3.23(.08)
2年	34	3.66(.66)	2.66(.75)	3.51(.61)	3.25(.10)
3年	32	3.71(.69)	2.51(.79)	2.48(.98)	2.87(.12)
4年	24	3.58(.69)	2.36(.85)	3.48(.78)	3.05(.16)
計	126	3.62(.64)	2.56(.80)	3.38(.74)	3.11(.06)
F値		.55	.82	5.98***	2.75*
多重比較				1, 2, 4>3	1, 2>3

*** $p < .001$

* $p < .05$

本研究の結果は、作文産出不安は学年による有意差はなかったが、学年が上がるほど作文不安が高まる傾向にあったとする Cheng et al.(2002)の結果を支持している。しかし、同じタイ人学習者でも、タイの高校生を対象とした第2言語学習不安を調査した下村(2008)の結果は、学年が上がるほど第2言語学習不安は減少している。これは質問票が第2言語教室内不安調査であり、発話に関する項目が多いこと、下村(2008)も述べているように、学年が上がるほど日本語学習への慣れや、選択科目として日本語を履修している学生であるため学年を追うごとに学習不安の高いものが履修をやめていることが原因と考えられる。同じタイでの日本語不安調査であるが、本研究では作文に関する不安であること、対象者が大学生で日本語主専攻であること、中上級レベルであることなどの影響が強いと考えられる。また、第2言語の作文不安は、発話中心の教室内学習不安とは習熟度との関連では異なることも考えられる。第2言語学習不安においては、学習経験や習熟度の関係は研究により正反対の結果が出ている。MacIntyre & Gardner(1989)ら多くの研究では初級者は第2言語学習不安が最も高く、能力が高くなるほど学習不安は低下するとしており、反対に、Cheng(2002)や Saito & Samimy(1996)では学年や習熟度が上がるほど第2言語の学習不安は高まるとしている。このことは Cheng (2002)が述べているように、第2言語不安の縦断的变化は、学習機関や指導法、評価の仕方などの社会的コンテキスト、学習者の動機、性格、自信、能力、学習ビリーフなどの個人的要因が複雑に関連しているからであろう。さらに、習熟度と第2言語不安の関連に対する結果の一般化のためには、上記の関連する要因をコントロールし

た研究が今後なされる必要がある。学習不安は個人の要因が複雑にからんでいることから個人差が大きい。本研究においても、学習者の作文産出不安因子が第1因子に挙げられた。そこで作文を書くことに対して特に不安度が高い学習者と低い学習者では作文産出不安以外の他の因子に対する関連が異なることが考えられる。

5.4 作文不安群別による因子との関連

学習者を作文不安の不安度により3群に分類した。作文産出不安の因子得点より平均値に標準偏差を加えた得点以上の得点群を高不安群、反対に、平均値より標準偏差を減じた得点より低い得点群を低不安群とした。平均値に標準偏差のプラス、マイナス範囲内の得点群は中不安群とした。各不安群の人数は下記の表のとおりである。これらの作文不安群の平均値に作文に関わる不安因子に差があるかを検討するため一元配置分散分析を行った。表4に結果を示す。

表4 作文不安群別因子別平均値と標準偏差 ()内の数値は標準偏差

	N	作文産出不安	作文評価不安	表現志向	作文自信
高不安群	20	4.51(.22)	3.00(.99)	3.03(.92)	2.65(.64)
中不安群	88	3.65(.34)	2.62(.69)	3.35(.67)	3.10(.56)
低不安群	18	2.50(.27)	1.78(.54)	3.93(.62)	3.66(.56)
F 値		191.16***	14.21***	8.12***	14.61***
多重比較		高>中>低	高>中>低	低>中>高	低>中>高

*** $p > .001$

表4より作文不安のすべての因子と不安群間に0.1%の有意で差が認められた。多重比較(最小有意差法)を行った結果、高不安群は中不安群より、中不安群は低不安群より作文不安、評価不安の平均値が高く、逆に低不安群は中不安群より、中不安群は高不安群より表現志向と作文自信の平均値が高いことがわかった。このことより、高不安群は他の群より評価不安が有意に高く、表現志向や作文自信が有意に低いことが確認できた。

次に、不安群の中でも高不安群、低不安群では作文不安因子間および作文成績間の関連に差があるのかを検討する。表5で高不安群、表6で低不安群の相関係数を示す。

表5で示すように高不安群では、作文産出不安と評価不安間に有意の正の相関が観察される。従って、高不安群の学習者は評価不安との関連が高いことがうかがえる。一方、表6より低不安群では評価不安と作文自信との間に負の有意の相関があることが分る。このことより作文不安の低い群の学習者は、作文における評価不安が低いほど作文自信が高くなり、評価不安が高いほど作文自信が低くなる傾向がうかがえる。Cheng et al.(1999)においても第2言語の教室不安や作文不安は自信の低さが重要な構成要素となっていると報告している。しかし、Cheng et al.(1999)においても本研究においても作文不安に関する各因子の関連を見るもので、因果関係を明らかにするものではないため、作文に関する不安、作文への自信、評価、表現に対する志向や意欲との因

果関係は明らかではない。従って、今後それらの因果関係を検討し、作文不安が作文の各因子に対してどのような影響を与えているのかを検討する必要がある。また、両群とも各因子間と作文の成績間に相関はなかった。このことは、作文の不安が高い学習者も低い学習者も作文不安が直接的に成績に関連するものでないことを示唆している。

表 5 高不安群の作文因子間および成績間の相関 (N=20)

	作文産出不安	作文評価不安	表現不安	作文自信	作文成績
作文産出不安	1.00				
作文評価不安	.48*	1.00			
表現志向	.05	-.39	1.00		
作文自信	-.15	-.07	.32	1.00	
作文成績	-.10	-.24	.15	.07	1.00

* $p < .05$

表 6 低不安群の作文因子および成績間の相関 (N=18)

	作文産出不安	作文評価不安	表現不安	作文自信	作文成績
作文産出不安	1.00				
作文評価不安	.33	1.00			
表現志向	-.34	-.26	1.00		
作文自信	-.40	-.55**	.21	1.00	
作文成績	-.25	-.24	-.18	.02	1.00

** $p < .01$

以上より、日本語で作文を産出することに不安を感じている高不安群の学生には、特に、評価に対する不安が高いことから、評価不安を下げる工夫、例えば、肯定的なフィードバックをする、言語形式の誤用より内容を重視する評価基準にするなどの評価法の工夫が示唆されると同時に、日本語で作文を書くことへの自信をつけさせるために日本語で作文を書くことの支援、日本語で表現できた喜びを感じさせるなど、書くことに対する励ましが必要なことが示唆される。

6. まとめと今後の課題

本研究では、日本語を主専攻として学習している中上級学習者 126 名を対象に、日本語での作文に関わる情意要因の中でも不安要因を取り上げ、不安の実態及び成績、習熟度との関連を検討した。質問紙調査法で調査した結果、以下のことがわかった。

- (1) 本研究の対象者の作文に関わる情意要因の不安は、作文産出不安、作文評価不安、表現志向、

作文自信の4因子構造である。

- (2) 作文の成績と作文産出不安因子間に負の相関がある。
- (3) 習熟度別では学年が上の学習者ほど表現志向、作文自信が低くなる傾向がある。
- (4) 不安の高い学習者群ほど評価不安が高く、表現志向と作文自信が低い傾向にある。

以上より、本研究では日本語での作文産出不安は評価による不安との関連が強く、作文の成績を下げる傾向にある。また、作文産出不安の高い学習者は日本語での作文に対する自信がなく、表現意欲や表現の楽しみを感じていないことが分る。作文の授業において、学習者の日本語での作文産出に対する不安を軽減するには、教師は作文産出不安に関連している評価への不安に配慮した教室活動の工夫をすると同時に、書くことに対する自信をつけさせる作文支援の必要性が示唆される。本研究の結果は、日本語で作文を書くことに関する因子間の関係や成績などとの関連を示すものでお互いの因果関係を示すものではないこと、さらに、外国語としての日本語学習環境のタイにおける調査であること、中上級学習者が対象であることなどを勘案し、解釈する必要がある。結果の一般化については今後の検証が必要である。今後の課題は、作文に関する因子間の因果関係の解明、高不安群へのインタビューによる作文不安への質的研究、作文不安と他の情意要因、たとえば動機、ビリーフ、自信につながる自尊心などとの関連などの検討である。

(付記)本稿は2010年8月に開催された日本語教育国際大会(台北、台湾)での発表内容に追加、修正を加えたものである。

注

- (1) 本稿では第2言語を外国語と同じ意味で使用しているが、目標言語が使用されているかどうかを区別するときは、第2言語を目標言語が日常学習環境のまわりで使用されている場合とし、外国語を目標言語が使用されていない場合と使い分けている。
- (2) 調査大学では、作文は日本人教員が担当しており、1年から4年まで各学年週に3時間の作文時間がある。3年の前期まで必修科目である。

参考文献

- 下村朱有実(2008)「タイ後期中等教育における選択科目としての日本語教育—高校生を対象とした第二言語不安調査からの一考察—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第5号、pp27-36
- 元田静(1997)「日本語教室および教室外における第二言語不安」『広島大学教育学研究紀要第二部』43、pp435-440
- 元田静(2000)「目標言語使用環境における日本語学習者の第二言語不安—その内容と程度について—」

- て」『広島大学教育学部紀要第二部』49、pp213-221
- 元田 静 (2005)『第二言語不安の理論と実態』、溪水社
- Aida, Y. (1994) Examination of Horwitz, Horwitz, and Cope's Construct of Foreign Language Anxiety: The Case of Students of Japanese. *The Modern Language Journal*, 78, 155-168
- Cheng, Y. ,Horwitz, E.K.,& Schallert, D.L. (1999) Language anxiety: Differentiating writing and speaking components. *Language Learning*, 49, 419-446
- Cheng, Y. (2002) Factors Associated with Foreign Language Writing Anxiety. *Foreign Language Annals*, 35 (6) , 647-656
- Daly, J.A.& Miller, M.D. (1975) The empirical development of an instrument of writing apprehension. *Research in the Teaching of English*, 9, 242-249
- Hays, J.R. (1996) A New framework for understanding cognition and affect in writing .In C. M. Levy & Ransdell (Eds.) ,*The science of writing: Theories, methods, individual differences and applications*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M.B. & Cope, J. (1986) Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70, 125-132
- Horwitz, E.K. & Young, D.J. (eds.) (1991) *Language Anxiety: From Theory and Research to Classroom Implication*. Prentice- Hall.
- Krashen, S.D. & Terrell, T.D. (1983) *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. San Francisco: Alemany Press.
- Machida, S. (2001) Test anxiety in Japanese-language class oral examinations. 『世界の日本語教育』第 11 号、国際交流基金日本語国際センター、pp115-138
- MacIntyre, P.D.& Gardner, R.C. (1989) Anxiety and second-language learning: Toward a theoretical clarification. *Language Learning*, 39, 251-275
- MacIntyre, P.D.& Gardner, R.C. (1994) The subtle effects of language anxiety on cognitive processing in the second language. *Language Learning*, 44, 283-305
- Saito, Y. & Samimy, K.K. (1996) Foreign Language Anxiety and Language Performance: A Study of Learner Anxiety in Beginning, Intermediate, and Advanced-Level College Students of Japanese. *Foreign Language Annals*, 29 (2) , 239-251
- Young, D.J. (1986) The relationship between anxiety and foreign language oral proficiency ratings. *Foreign Language Annals*, 19, 439-445